月からはじまり八月に終了した。その後、両墓地は撤去され、泊港が整備されて、掘削された両墓地の跡地には新しい街が生みだされた。

一九五四年一〇月一二日の琉球新報は「那覇都市計画四年の歩み」と題された記事を載せ、この墓地整理のことを次のように記している。「△墓地整理事業Ⅱ辻、若狭町の墓地整理事業を五一年五月三日開始し八月一〇日に遺骨の再火葬を終了、遺骨は奥武山公園内の仮安置所に納骨した、墓の筆数一、七一二筆、仮安置所に納骨せる所有者一、一一八人、費用六四六、〇〇〇円。」〔縮刷版琉球新報第二〇巻〕不二出版

円はB円である。火葬に要した日数はおよそ三カ月であった。最初の告知が那覇市の「急告」として新報、タイムスの両紙面に掲載されたのは一九五一年一月二五日であるから、それから数えても、火葬事業の全体は六カ月半程のことである。いかに急激に事業が行われたかがわかるが、この一斉火葬事業の影響は大きいと思われる、那覇市域の人々に近い将来の火葬の必然を認識させたと考えられる。一九五〇年代半ばの那覇市域の火葬率の高さには、この事業の執行がその要因の一つとしてあげられるものと思われる。

里修験と陰陽道

——新出の『篋篋』の分析を中心に——

小池 淳 一

前近代における東北日本の修験の活動範囲は広く、その影響は多岐にわたる。このことは地域宗教史、民俗信仰の両面で重要な問題をはらんでいる。陰陽道との関わりについて、すでに宮家準は「修験道と陰陽道」〔修験道と日本宗教〕一九九六〕において修験道書にみられる陰陽道の要素を中心とする分析をおこなっている。また近世会津の修験については藤田定興『近世修験道の地域的展開』(一九九六)をはじめとする多角的検討がなされている。ここで取り上げる只見の吉祥院については筆者も「民俗知とは何か」(高埜・澤編『近世の宗教と社会3・民衆のへ知』と宗教)二〇〇八)で若干の検討をおこなった。ここでは、以上の先行研究をふまえて、さらに南会津の修験の活動実態を探るために只見吉祥院に焦点をすえ、同家に伝来した『篋篋傳』の内容検討を試みたい。

近世の会津では本山派先達の南岳院が全体を統括し、現在の只見町域の修験の中では文政〜弘化年間、檀戸に居住した龍(瀧)蔵院が上通で、只見の吉祥院、文珠院は中通であった。五十嵐家の当主、英氏がまとめられた『不動尊と海老作本家』(二〇〇八、自刊)によると吉祥院は七代の行本から没年が判明し、十四代賢隆の時に明治維新を迎え、神職に転じ、五十嵐

第15部会

政直と名乗った。会津ではこうした里修験をホウイン（法印）と呼び、修験道廃止後も祈禱や教育などに携わっていた。

吉祥院伝来の『篋篋傳』は全三巻からなる。各巻に本文の字句に関する若干の書き込みの他に、別筆で関連類似する記事が付け加えられている。成立については、巻二（中巻）巻末の書き込みによると中世（元龜三年以前）に遡る。三巻という巻数も古態を残したものと見える（中村璋八『日本陰陽道書の研究（増補版）』一九八五、参照）。さらに修験の家に伝来したことから、東北大学本（永禄二年・一五五九写、船曳宝船寺旧蔵）とともに東北地方における陰陽道の知識の伝播についての貴重な典籍ということができよう。

こうした『篋篋傳』の特徴について、さらに詳しく書き込み注目して考察しておきたい。巻一（上巻）の巻末には、正月一日の十干でその年の天候や豊凶を判断するための知識が記載されている。類似の知識は岩手県二戸市似鳥の三上家本『東方朔秘傳』（近代の写本）の中にさらに「東方朔置文ノ事」として記述がある（拙稿「三上家本『東方朔秘傳』——解題と翻刻」『愛知県立大学文学部論集』五一、二〇〇三、参照）。また、巻二（中巻）の巻首には「住吉裁衣」という書き込みがある。前掲中村著書によれば、東北大学本（第二）には「住吉大明神物裁日取」という記事があるという。『月庵醉醒記』（天正期成立）中巻に「住吉衣たちの吉日」があり、寛永九年（一六三二）板の『大ざつしよ』巻上六九にも「物たちに吉日をえらふ事但すみよしざつしよと名付也」という記事がある（橋本・小池編『寛永九年版大ざつしよ』一九九六）。これらからすると、

こうした生活の中の日の吉凶の知識が、陰陽道の知識として修験を媒介に広がっていったことが推測できる。

以上の検討から、近世会津の里修験が、中世から連続して陰陽道書を利用し、生活知識、特に日の吉凶や豊凶の予測に関する知識を保持していたことが判明した。ホウインの宗教的活動はこうした系譜による知識に裏打ちされていたのである。こうした東北における里修験の宗教的な知識の吸収、利用は只見吉祥院独自の活動であろうか。今後は『篋篋傳』以外の吉祥院蔵書・聖教類をも検討するとともに、会津全体の里修験とそれに関わる民俗を幅広く検討して、東北における修験道と陰陽道との関係をさらに解明していきたい。

卜占における宗教的職能者の関与について

—— 粥占を事例として ——

亀崎 敦司

三重県津市河芸町北黒田地区では、例年二月十四日に「大般若経転読粥占」という儀礼が行われている。現地で通称「大はんにか」と呼ばれるこの行事は、津市中心部の曹洞宗四天王寺から導師として僧を招いて大般若経転読を行ってもらう傍ら、筒粥形式の粥占を執行し、その年の米の出来を占うものである。

この行事では、大般若経転読が行われることに加え、会場に